

意見

岩田 靖夫

稲垣さんの御提題は、もっぱらキリスト教の教義としての「救い」において、「神秘」がいかに理解されているか（もしくは、されるべきか）という問題に係わっている。そのかぎり、無信仰者にとってはその内容はおそらくはかれの関心の範囲内には入らないであろう。これに対して、信仰者にとっては、その内容は反駁的に検討すべきものではなく、より深く理解すべき前提的課題を提示されたことになる。そこで、今ここでは、意見を表明すべく命ぜられた者としては、後者の立場に立って二三のことを申し述べてみたい。

先ず、稲垣さんは、救いの業の全体が自由意志によると共に恩寵によるものであり、この「救いの業における恩寵と自由意志との合一」がそれ自体神秘である、と言う。この場合、われわれ人間は「善いことを思考し、意志し、為しとげる」という三つの働きを行って救いに至るのであるが、「善いことの思考」はもっぱら神がわれわれなしに（*sine nobis*）為す働きであり、これに対して、後の二つ、すなわち、「善いことを意志し、為しとげる」のは、われわれから（*ex nobis*）ではないが、われわれなしに（*sine nobis*）でもなく、神が働くことである、と言う。こうして、これら三つの働きにおいて、最初の働きと後の二つの働きにおいてややニュアンスの違いはあるが、人間と神との全面的な協力が語られている、と理解してよいであろう。救いの業における「人間と神とのこの全面的な協力」を、稲垣さんは、「キリストが私において語り行う」というパウロの告白のうちに確かめている。パウロにおいて「人間の業」は「神の業」から切り離せない。パウロの意志や業は神の業のうちでのみ成立する。これが、稲垣さんが提題において展開した「神秘」の概念である、と筆者は理解する。

さて、筆者としては教義について申すべきことは何一つない。そう言われれば、「なるほどそうか」と思うほかはない。ただ、このような教義の説明のうちの一つの思想が展開しうる可能性があると思うので、その点をここで述べてみたい。恩寵と自由意志は別々にではなく、常に協同して働く、と言われる。特に、「救い」の発端で

ある「善いことの思考」は「もつばら神がわれわれにおいて為す働き」である、と言われる。そうであれば、われわれが善いことを考えているとき、神がわれわれの中で考えているのであるから、すくなくとも「善いことを考えている限りは」、われわれ人間と神とは一致している、ということになるであろう。あるいは、神とはわれわれにおける「善いことの思考」として己を示す、と言い換えてもよいかもしれない。この思想は、神がいかなる者であり、いかなる方向に求められるべきか、を示唆しているかもしれない。すなわち、すぐれて人間の倫理的行為において神は現れるのである。われわれが善きサマリア人であるかぎりにおいて、神の栄光は実現する。これは現代においてはレヴィナスが極限にまで展開した思想であるが、この場合なにが「神秘」なのか。「およそ人間が善いことを思考し、意志し、為す」ということそのことが「神聖なもの」の出現であり、驚くべき「神秘」なのではなからうか。そもそも「この宇宙に倫理的行為がある」ということが、何事にも優って驚くべき「神秘」なのではなからうか。

宮本さんの御提題は、判断論という場面に「神秘」の光が差し込む状況を指摘する点にある。宮本さんによれば、判断には付帯的述語判断(A)と本質的述語判断(B)があるが、そのいずれの場合にも、繫辞「ある(est)」は主語と述語との同一性のしるしである。すなわち、Aにおいては、主語と述語との間に必然的連関がないにもかかわらず、一個の事物(ens)として現実的統一体が成立しているのは、繫辞「ある」の志向の先に「あり、あらしめる働き」としての *actus essendi* があるからである。また、Bにおいては、主語と述語との連関は必然的ではあるが、本質を現実化する働きとして同様に *actus essendi* が志向されている、と言う。すなわち、判断内の意味論的差異に現実性を与える原因は、一見判断からもっとも遠くに外在する「第一の不動の動者」だ、ということである。それは、判断志向に内在的構成的に働く根源的他者である、と言われる。

さて、判断のうちに、その主語と述語とを結びつけてそれら全体を現実化する力を読み取ることには、もし存在者の存在根拠の無さについての了解が前提されているとすれば、別に異論はないであろう。それは、主語と述語との結合が偶然的(contingent)である、ということと、本質が現実化することもまた偶然的である、ということの認識と、その偶然性の背後になんらかの力(存在、無)を指定することから引き

出された当然の帰結であろう。しかし、この帰結は、そもそも、この世界に存在者が存在するということが偶然的である、という了解から来ているのではないか。ハイデガー的に言えば、存在者が無的（存在根拠をもたない、nichtig）である、ということの含意に他ならない。この点は、宮本さんが次のように言う点から明らかである。「もし、ens が自らの力で存在するならば、自らに対し存在原因となるだろう。しかし、どんな ens も自らの力で存在しえない以上、存在 (esse) はあたかも光が大気に流入するようにエンスの外部から与えられるに違いない」。だが、結局はこういうことを言うのならば、なぜ話を判断から始めなければならないのだろうか。つまり、始めから「存在者の存在根拠の無さ」という話なのである。「主語と述語の結合に必然性がない」とか「本質は自らの力で現実化しえない」とかいう事態は、そもそも「存在者に存在根拠がない」という根源的事態の一樣態にすぎない、と言うべきではなかろうか。

宮本さんの御提題のうちには、もう一つ「自己と非相関的で異質な他者、自己贈与的で自由な他者との出会い」という論点がある。「この地上で、自己に還元できない自由な他者と出会える歴史的なカイロスを生きる」とも言われる。そこで、われわれは知性の自閉的独我論を突破できるのであり、更に、この「他者の他者性」に触れることにより actus purus なるベルソナへと開放されるのである。宮本さんによれば、これが神秘である。

さて、ベルソナとしての他者の背後にある何者か、あるいは、むしろ、ベルソナとしての他者そのもの、との出会いが神秘である、という考えには、筆者は全面的に賛成である。しかし、このことは、判断論を介して提示された存在者の偶然性とその彼方に拮定される根拠、という問題とは、直接の連関はないのではなかろうか。他者という概念を利用して両者を結びつけることには、いささか無理があるだろう。この両領域は別々の筋道を通して、それぞれに神秘を指し示している、と言うべきではなかろうか。
